

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目： 若手研究 (B)

研究期間： 2007~2009

課題番号： 19720056

研究課題名 (和文) 作り物語写本の残存状況と書写様態に関する研究

研究課題名 (英文) The study of the written form and the remaining situation
in the manuscripts of 'tukuri-monogatari'.

研究代表者

加藤 昌嘉 (KATO MASAYOSHI)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号： 70335321

研究成果の概要 (和文)： 研究対象は、平安～鎌倉時代 (10-14 世紀) に作られた '作り物語' (『源氏物語』など) である。私は、物語の写本に着目し、それらの本文異同・書写様態・残存状況、および、物語の注釈書などを調査した。具体的には、『源氏物語』の特殊な本文が『更級日記』に受け継がれていることを明らかにしたり、現存『源氏物語』に含まれない「巢守」巻の内容を考察したり、作り物語全体に共通する要素を抽出して他のジャンルの諸作品と比較したり、物語に対する従来の文献学の問題点を洗い直したりした。写本の形態に着目する本研究は、内容分析ばかりを行う近年の物語研究を超越し、物語研究の新たな方法を呈示するものである。

研究成果の概要 (英文)： The subject of this study is 'tukuri-monogatari' — *The Tale of Genji etc.* — from Heian-period to Kamakura-period (10C-14C). I focused on the manuscripts of 'monogatari' and investigated the differences in text, the written form, the remaining situation, and the commentary of 'monogatari'. For example, I clarified that the original representation in *The Tale of Genji* related to the representation of *Sarashina-Nikki*, I considered *Sumori* which was excluded from *The Tale of Genji*, I extracted the common element from 'tukuri-monogatari', and compared it with the element of 'waka' and 'nikki', I criticized the traditional philology for 'monogatari'. By focusing morphology of each text, this study exceed the recent study which analyzes only narrative contents, and present new approach for 'monogatari'.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	360,000	2,360,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文学・日本文学

キーワード： 古代文学、中古文学、作り物語、源氏物語、写本、書記法、本文、異文

1. 研究開始当初の背景

(1)平安文学の写本に注目した研究としては、1940年代の池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』・堀部正二『中古日本文学の研究』が先駆的業績としてあった。しかし、1960年代以後は、学会の興味が作品の内容分析へシフトしてしまい、写本そのものの研究がなおざりになっていた。

(2)欧米では、1990年代以降、テキスト生成研究 *la genetique* など、草稿に注目する研究方法が築かれ、文学を把握する新たな概念が呈示されるようになっていく。特に、ブルースト、マラルメ、マルクスなどに関しては、研究方法・研究概念そのものの変革が進められており、日本でも、新たな文献学・新たな本文批判学が求められる。

(3)こうした状況を鑑み、日本でも、旧来の書誌学・文献学の枠を超える新たな写本研究の土台を作り、ゆきづまった平安文学研究に活路を見出す必要があった。

(4)現在の『源氏物語』研究は、物語内容や作中人物を表現に即して分析する、きわめて閉鎖的な状況にある。つまり、『源氏物語』の成立過程とか、『源氏物語』の中の失われた巻巻とか、『源氏物語』の享受のされ方とかについては、多くの研究者が無視をきめこんだままとされている。この潮流は、『狭衣物語』『夜の寝覚』研究などにも及んでおり、病巣は根深い。本研究によって、写本の実態、本文の実態に即した平安文学研究を進めるべきであると考えられる。

2. 研究の目的

(1)平安時代に成った『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』、鎌倉～室町時代に成った『我身にたどる姫君』『八重葎』『恋路ゆかしき大将』など、伝存する作り物語約30作品を研究対象とし、それらの写本の残存数・書記方法・書写年代・本文異同等を調査することによって、物語の成立・改作・増補や、物語の受容のされ方、他ジャンルとの差異などを解明することが、本研究の目的である。

(2)上記の目的のため、各物語の写本・版本・古筆切（写本の断簡）をくわしく調査する。これまで「善本」とされ注釈の対象となってきた写本の他にも、考察すべき写本がいくつもあり、それによって、『源氏物語』の成立過程や、時代ごとの享受のされ方が明らかになるはずである。

(3)上記の目的のため、各物語の注釈書・系図

や、物語以外の作品（歌集・日記）をも調査する。特に、和歌の書記のしかたについては、物語とその他のジャンルとで大きな違いが見出されるはずである。

3. 研究の方法

(1)鎌倉～江戸時代に書写された『源氏物語』の写本約200種のうち、現行の本文と異なる文章内容を持つ約30点を調査する。その書写年代・書記方法・本文異同について考察する。具体的には、天理図書館蔵の国冬本・池田本・周桂本、国文学研究資料館蔵の橋本本などを調査。

(2)これまでなされて来た『源氏物語』の本文研究の方法・概念・結論を、再度、検討し直す。諸本分類の考え方や本文異同の捉え方について、考察する。具体的には、池田亀鑑『源氏物語大成 研究篇』や阿部秋生『源氏物語の本文』などの結論や方法を再検討し、写本の実態と合わない部分を問題化してゆく。

(3)『源氏物語』の古系図および古注釈書を調査し、鎌倉～江戸時代における『源氏物語』の巻数・内容等を再検討する。特に、現行の『源氏物語』に含まれない「桜人」「巢守」の残存資料を検討し、その内容について考察する。具体的には、前田育徳会蔵の『源氏釈』所載の「桜人」関係記事、国文学研究資料館蔵の『光源氏系図』所載の「巢守」関係記事を調査する。

(4)1950年代に行われた『源氏物語』の成立論について、『うつほ物語』や『我身にたどる姫君』と比較しながら、写本の形態的特徴を考慮に入れたうえで、再検討する。具体的には、武田宗俊「源氏物語の最初の形態」や風巻景次郎「源氏物語の成立に関する試論」が築いた成立論を、写本の形態や、他の物語の成立を考慮に入れたうえで再検討する。

(5)『源氏物語』や『和泉式部物語』の写本の書写方法を調査し、それを、歌集の写本・仮名日記の写本と比較しつつ、特に、和歌の書記法とジャンル意識について考察する。具体的には、和歌2字下げで書かれた写本と、そうでない写本（和歌を地の文中に埋没させたもの）とをピックアップしてゆく。

(6)現存する作り物語約30作品と、歌集・仮名日記・歌物語・歴史物語・説話・お伽草子とを比較し、写本の形態的特徴・内容の構造特徴から、ジャンルの分類法について、より実態に即した考え方を探る。具体的には、造り物語（フィクション）とそれ以外の物語、

という二分化によって、文学史全体の組み替えを試みる。

(7)『八重葎』『狭衣物語』の1写本を、他の写本と比較しながら解読し、異文の発生と引き歌の認定法について考察する。具体的には、静嘉吉堂文庫蔵の『八重葎』の全文注釈、および、大阪青山歴史文学博物館蔵の慈鎮本『狭衣物語』の全文注釈を試みる。

(8)物語写本に書き入れられた傍記・注釈を調査し、本文異同が発生するメカニズムについて考察する。具体的には、天理図書館蔵の周桂本『源氏物語』への書き込み、および、国文学研究資料館蔵の『湖月抄』への書き込みを調査する。

4. 研究成果

(1)『源氏物語』の写本のうち、保坂本の持つ一部の表現が、『更級日記』の本文と影響関係を持っていることを明らかにした。具体的には、浮舟物語中の「星」をめぐる表現が、保坂本『源氏物語』の中でのみ連動を果たし、それを、『更級日記』が受け継いでいることを論じた。

(2)旧来の『源氏物語』研究では、大島本を“善本”として重要視して来たが、その結論を導く過程にはさしたる論拠がなく、むしろ、大島本が室町時代以降いくども改訂された改竄本であり、藤原定家の写本とは関係がないことを明らかにした。具体的には、大島本『源氏物語』に書き入れられた様々な修正を取り除くと、これを《青表紙本》と認めることも、これを注釈書の底本に使用することも不可能であることを論じた。

(3)国文学研究資料館所蔵の『光源氏系図』には、現存しない「巢守」巻に関する記載が多く残っており、それを整理することで、「巢守」巻の内容を復元した。また、近年、池田和臣氏が発見・紹介した「巢守」の断簡をも調査した。具体的には、系図を作った人々は、「巢守」本体を読んでいなかった可能性が高いこと、および、「巢守」は、時間軸上、浮舟物語に後続するものであること、などを論じた。

(4)1950年代に行われた『源氏物語』成立論(阿部秋生・武田宗俊・風巻景次郎らによる)を再検討したうえで、伝存写本の形態的特徴や中世に発生した本文異同を加味しつつ、現存『源氏物語』が、現在の巻順どおりに書かれたのではないことを明らかにした。具体的には、『うつほ物語』の成立過程を手がかりに、作り物語というものが、作者名なし&巻名のみ1写本として存在し、『源氏物語』は、その集積に過ぎず、これを、主人公の年齢順に並べたのは後の読者に過ぎないことを論じた。『源氏物語』を桐壺巻→帚木巻…

…と読む現在の巻順は、一度、ゼロに戻すべきことを主張している。

(5)物語や日記の写本では、和歌が改行1字下げで書記され、歌集の写本では、和歌が1字上げで書記されることに着目しつつ、『和泉式部物語』写本や『源氏物語』写本の中に、それとは異なるイレギュラーケースがまま存在することを明らかにした。具体的には、歌集や日記の写本では、時に、和歌を2字上げにして書くイレギュラーケースが存在するが、物語においてはむしろ、和歌があっても改行せず、地の文中に埋没させて書くのが平安時代のポピュラーな書記法であったことを論じた。

(6)現存する作り物語約30作品に共通する要素を抽出しつつ、それを、歌物語・歴史物語・軍記物語・説話集・お伽草子と比較することで、フィクション/ノンフィクションという二分法で分けるのではない、新たな分類概念を呈示した。具体的には、“架空の登場人物・架空の舞台”によって進められる作り物語と、“実在人物の和歌”“実在人物の言動”をもとに進められる歌物語・歴史物語・軍記物語・説話は、截然と分かれたるものであり、さらに、お伽草子は、その5つとは次元を異にする概念であることを論じた。

(7)写本ごとに本文を異にする『狭衣物語』などに着目し、それぞれの本文に合わせた引き歌認定と物語解読を進めた。具体的には、慈鎮本『狭衣物語』を注釈しつつ、これまで活字化された『狭衣物語』とは異なる注釈方法を試みるべきであることを主張した。

(8)『源氏物語』写本に書き入れられた傍記や注釈を分析することで、時代ごとに、本文が増補されたり削減されたりする様相を明らかにした。具体的には、天理図書館蔵の周桂本『源氏物語』への書き入れに着目し、特に、宇治十帖では、“薫は業平と同様な色好みである”と見る読解法が中世に存在していたことを論じた。

(9)本研究の成果は、随時、雑誌などに発表していたが、その過程で、中古文学会関西部会シンポジウム「大島本源氏物語の再検討」や、大阪大学国語国文学会ワークショップ「会話文・地の文に関する通時的・多角的研究」や、武蔵文学座談会「王朝物語の古筆切」への招聘を受け、それぞれ、パネリストとして参加した。いずれにおいても、本研究の成果を踏まえた発表・発言をおこなった。また、雑誌『国語と国文学』の特集「王朝物語の研究」への寄稿依頼などを受けた。

特に、「大島本源氏物語の再検討」は、その後、和泉書院から報告書として活字化され、『源氏物語』本文研究のまったく新しい方向性を示すものとして、注目された。

また、散佚「巢守」に関しては、近年、新出の古筆切の存在が報告されたことと相俟つ

て、拙稿「源氏物語古系図のなかの「巢守」」が、包括的報告書として活用されることとなっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ①加藤昌嘉、源氏物語古系図のなかの「巢守」、平安文学の古注釈と受容、査読なし、第 2 集、2009 年、pp17-34
- ②加藤昌嘉、『源氏物語』は手で書かれたものに他なりません。、日本文学誌要、査読なし、第 80 号、2009 年、pp23-38
- ③加藤昌嘉、作り物語のエレメント、国語と国文学、査読なし、第 86 巻第 5 号、2009 年、pp10-19
- ④加藤昌嘉、平安和文における鉤括弧と異文、語文、査読なし、第 91 輯、2008 年、pp78-85、
- ⑤加藤昌嘉、本文の傍らに／或いは本文となって、平安文学の古注釈と受容、査読なし、第 1 集、2008 年、pp13-20

[学会発表] (計 3 件)

- ①加藤昌嘉、『源氏物語』は手で書かれたものに他なりません、法政大学国文学会、2009/7/12、於 法政大学
- ②加藤昌嘉、本文研究をしていて疑問に思うこと、中古文学会関西部会、2009/6/7、於 京都文化博物館
- ③加藤昌嘉、平安和文における鉤括弧と異文、大阪大学国語国文学会、2008/1/12、於 大阪大学

[図書] (計 4 件)

- ①加藤昌嘉、他、『源氏物語』はどのように出来たのかを考えるために、テーマで読む源氏物語論—紫上系と玉鬘系—、勉誠出版、2010 年、pp1-24
- ②加藤昌嘉、他、琴で／笛で和歌を詠む、平安後期物語の新研究—寢覚と浜松を考える—、新典社、2009 年、pp203-224
- ③加藤昌嘉、他、本文研究と大島本に対する 15 の疑問、大島本源氏物語の再検討、和泉書院、2009 年、pp51-85
- ④加藤昌嘉、他、星と浮舟、平安文学の新研究—本文と表現を考える—、新典社、2008 年、pp215-230

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 昌嘉 (KATO MASAYOSHI)

法政大学・文学部・准教授
研究者番号：70335321

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：